秀才伝説

飯場移転

日本シボレックス関西工場の建設工事は、昭和三十七、八年ごろだったと思います。

今ではもう、あまり珍しがられなくなったシボレックスですが、それとて建設関係の世界でのことで、一般にはまだ

「ナイフで削れるコンクリート」

「木材と同じ位の重さで、水にも浮く」

と聞くと、目をみはる人が多いようです。

まして、二十年も前には、この浮世の人たちの間でさえ驚異的な話題でした。

何しろ「石が流れて、木が沈む」を地で行くのですから、これはもう驚くのが　当り前のことで——

それにしても、そういうコンクリートが、どこやらの外国で発明されたとか、遠からず日本にも進出するだろうとか、そんな話だけでしたら、それこそただの話のタネで終りなのでした。

松本組にも、本田親父にも、そして私自身にも、何のかかわりもなかった筈です。

ところが、そのシボレックス工場が、尼崎に建設されることになったのです。

場所は阪神出屋敷駅近くの向島町、かっては飯場銀座とよばれ、土工飯場が軒を並べ、当時は旭硝子の倉庫になっていた土地。

施工は柄谷工務店。とい　えば松本組はその孫請けと、これまでくわしく説明した通りです。

となれば、もはや他人事ではありません。

身近も身近、自分自身の大問題です。

まず、松本組は道意町の飯場を移転しなければならなくなりました。

向島に工場を建てるには、まず旭硝子の倉庫を移転しなければなりません。その移転先が道意町の用地と決ったのです。

もともと、ここも旭硝子の土地ですから、松本組としては否も応もありません。

松本組は藪野建設の下請、その藪野は柄谷工務店の下請、そのまた柄谷に旭硝子出入業者、というタテの関係なのですから、旭硝子と松本では、月とスッポン、鐘と提灯、王様と乞食みたいなものでしょうか。

土工飯場のとりこわしなんて、旭硝子のエライさんにしてみれば、犬小屋の移転ぐらいにしか思ってないのかもしれません。

——が、松本組にしてみれば大事件です。

そもそも「飯場」というのは、「土木工事のために建てられた労働者たちの仮の住居」ではありますが、一がいにそうとばかりも言えません。

ダム工事などの野丁場で、一定の期間を定めて建てられた飯場は、工事が終れば取り除かれ、今でも文字通り昔ながらの「飯場」です。

しかし、時代が変われば言葉の中味も変ってきます。

現代のように交通事情が発達してくると、マイクロバスなどで労働者の送迎が出来ますから、よほどの大工事でないかぎりは、一々現場に飯場をつくりません。

今では、飯場といっても「出張先の宿泊用仮小屋」ではなく、「労働者が集団で生活し、臨時事所に配置された現場へ、日々行動出来る根拠地」という形のものが多くなっています。

道意町の松本組飯場も、後者の形式です。

それ自体は掘っ立ての仮小屋でも、そこでの生活は、それなりに定着しています。

仕事も柄谷の別家ばかりでなく、ザロ工務店などの下請に入ったり、行動半径はかなり広いのです。

そうかんたんに追い立てられてはかないません。

はじめは向島にあった飯場が、旭硝子の都合で、そこに倉庫を建てるからと追いはらわれ、今度もまた、旭硝子の同じ都合で追い立てられるのです。

と言って、文句を言うわけにはまいりません。

土地は旭硝子の土地ですし、もともと飯場とは土方の仮小屋です。いつかは、取り払われる運命だったのです。

それにウラミ、ツラミを言うのは、こちらが甘いというべきかもしれません。

シポレックスは、ふつうのコンクリートがセメントと砂、バラスを混ぜるのとちがい、けい砂（シリカ）などとセメントを混ぜて製造されます。

そのシリカは硝子の製造には欠かせない原料です。

日本シポレックスは、大日本インキを中心とした三菱系資本と外資との合弁会社ですけれど、その三菱系資本の中に、旭硝子が一枚加ったのは、ただ三菱系だからというだけでなく、その原料が共通していたからなのでしょう。

旭硝子は、日本板硝子と並んで、日本の板硝子の生産を二分する大メーカーで、その尼崎工場は旭硝子を代表する大工場です。

ということを頭において考えれば、旭硝子尼崎工場にごく近い所に、すでにある倉庫を移転させてシポレックス関西工場が建設される理由も、のみこめる気がします。

それがのみこめてみると、飯場の移転も、

「しゃあないなあ」

と、時の流れに逆らえぬ、アノあきらめに似た気持で納得します。

そして、旭硝子は、松本組のために（というよりも柄谷工務店のために）替地を用意しました。

大浜町にある社有地を飯場のために提供したのです。

向島から道意、道意から大浜と、移転のたびに旭硝子の工場から少しづつ遠くなりました。

初めは徒歩で五分とかからなかったのが、十分以上になり、大浜からは三十分近くかかるようになりました。

ともかく、松本組だけでなく、柄谷系の窯、大工などの飯場が大浜に移転しました。今度は道意とくらべて土地がせまいので、各飯場は軒を接して並びましたから、それだけお互いの親近感を増したようでした。

それはともあれ、今度の飯場も旭硝子の土地であるということに、松本親父は思うところがあったようです。

いずれまた、旭硝子の都合で移転させられる日が、遠からず来るに違いない、と。

それは、いつ不意にやって来るかもしれないし、移転の費用、その他のロスも小さくない、それならいっそー旭硝子とも、柄谷とも無関係な土地に、自分の飯場を建てればよい。

さいわい、松本組の三つの飯場のうち、平山飯場だけが同じ道意町でも、旭硝子社有地でない土地にありました。広さも百坪ほどあって、二階建てなら十分な収容力がありそうです。

木造モルタル塗りだが、本格築の立派な飯場を建ててやると、親方は非常な意気込みでこの計画の実現にとり

かかりました。

大浜の飯場が出来上ると、直縫班や、本田班はもちろん、平山班も、一まずそこへ移りました。

そうしておいて、平山班の旧飯場をとりこわし、基礎工事がはじまりました。

親方は基礎部分に耐火煉火瓦を使うつもりでした。旭硝子では不要になったそれを、カマの改修工事の度にすてます。私たちにはおたじみになっていた耐火煉瓦です。

「あれはいい。あれを集めろ」

と親方は上機嫌で若い衆に命じました。

何しろ、何千度という硝子を溶かすカマに使う材料です。強さは申し分ありません。しかも、棄てる物を生かして使うのですから、費用の節約にもなります。

まさに一石二鳥です。

しかし、世の中、そう甘くはないのです。

いざ仕事にかかってみると、百坪の建物に使う基礎石は思ったより多くいるのに、耐火煉瓦はそれだけ集まりません。

注文してあつらえるならともかく、不用になって棄てる物を集めるのは限りがあるわけです。それに、その頃、旭硝子ではカマの修理もなかったのです。

で計画が変更になりました。

それが専門のはずの土工飯場の基礎工事がこれなのですから、とんだお笑い草です。

計画変更は基礎工事ばかりではないのです。

最初、親方の計画では、木材や建具などは、これまで家屋などの解体工事の度に、これはと思うものを集てずにたくわえてきたので、それを使えば、その分の費用は半分、イヤうまくゆくとロハになるとふんでいたのです。

ところがドッコイ、これまた思わく違いでした。

それはそうでしょう。あちらの学校、こちらの事務所と、種々雑多な建物から寄せ集めの古材です。四寸角が十本ほしいのに、三本しかなかったり、あっても寸法が足りない、不要な所にホゾ穴が顔を出すなどと、とかく間に合わないのです。

それやこれやで、瓦ぶきの筈だった屋根はトタンぶきになり、モルタル塗りの筈の外壁も、途中でスレート張りに変更し、それも最後には波板鉄板にまた変るという有様です。

それでもともかく飯場が出来ました。

全体に黒ペンキを塗って、遠目には倉庫か工場のように見える異様な建物ですが、「住めば都」のたとえもあります。ともあれ、松本組としては、旭硝子の都合などで追い立てをくったりすることのない、自主独立の本拠

地が出来たのです。

後に松本組が、飯野建設の下請けから脱して独立する下地は、このときに出来たといえるでしょう。

シポレックス

松本組の飯場が新築される間に、シポレックス工場の建設工事も進んでいました。

この工事の施工が柄谷工務店と決まったことには、少しばかりいきさつがあります。

何といっても近代的な大工場の建設です。工事を希望する業者も多かったと聞いております。

この工場の製品は建築材料です。と言うことは、この工事を請けることは何彼と便利が予想されます。

ですから、世間で大手と呼ばれる業者にも施工を希望する者が多かったのです。

この業界で大手といえば、鹿島、竹中、大林などなど、いくつか数えられますが、地方業者の柄谷はその数に入りません。

それなのに、それら大手をさしおいて柄谷が指名されたのは（入札があったか、談合があったか、そこまでは知りません。しかし結局はそうなったのは）そこには

ウラがありました。

といっても大した謀略ではありません。話は単純なのです。要するに、柄谷が旭硝子の出入業者だったからというにすぎません。

単純すぎて怖いぐらいです。

もっとも、柄谷はただの出入業者ではありません。

柄谷の社長と旭硝子尼崎のエライさんは、個人的にも大変親しい間柄という噂です。

それも一通りや、二通りではないと聞いています。

そのため、旭硝子の工場、事務所、社宅などの、土木、建築、営繕関係の仕事はすべて柄谷が引き受けてきました。

工場の通用門には、旭硝子の守衛がいるのは当然ですが、柄谷の守衛も常駐していたという事実だけでも、その間柄が並々でないことは察しがつくでしょう。

旭硝子の製品を梱包する箱も、柄谷の傍系会社（晶平工業）が一手納入でした。

更に旭硝子の製品から原料その他の運送も柄谷が引き受けていました。その仕事だけで柄谷工務店の運送部は黒字でやっていけたということです。

それほどにからみ合った、親子か兄弟のような関係なのです。

前の戦争のとき、多くの都市が空襲で焼かれてしまったので、戦後の日本は決定的な住宅不足になやんでいました。いくら建てても足りない位でした。

ということは、板ガラスの需要もまた然りだったということです。旭硝子は年々好調に売上げをのばしました。

日本経済が戦争の打撃から立直り、景気が回復すると、この傾向は更に拍車がかけられました。

こうして旭硝子は肥り、そして柄谷もまた肥りました。それがまた両者を、いよいよ、切っても切れない関係にしました。

シポレックス工場の建設直手より、一、二年前に旭硝子尼崎工場の本事務所が落成しています。木造二階建てだった旧事務所を廃して、坪数もはるかに大きくなった鉄筋コンクリートの四階建てです。

もちろん、この工事も柄谷でした。

そして、今度もまた、なのです。

本事務所のときは別に問題はありませんでした。それは旭硝子の内部のことなので、出入業者が施工して、いわば当然といえるからです。

しかし、シポレックスは違います。

旭硝子が土地を提供しているといっても、他社の資本も入った別会社です。

柄谷以外の業者も、工事獲得に乗り出し、それぞれに運動しました。

それが柄谷に決ったので、他の業者（その中に大手業者も何社かふくまれていたそうです）は、不公平じゃないかと激しく抗議したと聞いています。

ということは、入札とか、談合とかの形をとらず、指名で決めてしまったのではないでしょうか。

抗議の矢面に立たざるを得なかった旭硝子は、次の機会には必ず柄谷以外の業者も参加してもらって、公平な方法で施工者を決める、という言質を与えたそうです。

そんな騒動があったと、私のような下っぱ土方の耳にも噂が流れこむほどに、これは大工事だったのです。

噂は噂であって、どこまで真実か知りませんが、しかし、まるきり根も葉もない話ではなかったようです。

それというのも（後の話になりますが）、二年後位に私らの耳に、次のような噂が聞こえてきたからです。

旭硝子が業者たちに言った「次の機会」が早くもやってきて、厚板硝子工場の新設工事が始まったのです。これまたシポレックスに劣らぬ大工事でした。

その施工も柄谷でした。

で、前記業者たち（その中に竹中工務店も入っていたそうです）が、カンカンに怒ってしまったのです。